ほんばこ

No. 41

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 41 号（通巻第 57 号）

2013 年 7 月 12 日発行

〒101－0003 東京都千代田区一ツ橋２－６－２

日本教育会館５階

教 育 図 書 館

Tel/Fax：03（3230）4437

Mail：toshokan32304437@jec.or.jp

http://www.jec.or.jp/tosho/

● 目 次 ●

・本との出合い　岡島　真砂樹　2ｐ

・教育図書館のご案内　3ｐ

・最近の受入図書（１）教職員組合史・平和資料の収集情況　4ｐ

・図書紹介……国民教育文化総合研究所放射能プロジェクトチーム編

『みんなの放射能入門　原発事故の被ばくを避ける』

中川　登志男　4ｐ

・最近の受入図書（２）　6ｐ

本との出合い

岡　島　真砂樹

◇子どもの頃

私の出身の石川県能登半島（能登町）は、自然豊かな田舎です。2011年には、「能登の里山・里海」が、日本で初めて「世界農業遺産」に認定されたところです。

子どもの頃、ゲーム機やパソコン等はもちろんなく、学校から帰れば外遊びの毎日でした。

休みの日には、春は海や川で魚釣り、夏は海でサザエやアワビ取り、神社の境内でセミの子（幼虫）探し、秋は山でコケ（きのこ）やアケビ取り。冬は、山で竹スキー……

小さい時から、好奇心が旺盛で、負けずぎらい。また、体を動かすことが好きで、小学校の４年からはスポーツ、とりわけ住んでいる町がソフトテニスに力を入れていたため、遅くまでテニスに明け暮れていました。学校の勉強は好きでしたが、家では落ち着いて机に向かうことがなく、さすがに親も心配になったのでしょう。私に本を買ってきて、机に向かわせようとしました。ジュール・ヴェルヌ作の「十五少年漂流記」です。冒険物で、私が興味を引くと思ったのでしょう。しかし、本を読むことに慣れていない私には、文章が長く、一生懸命読んでいるつもりでもなかなかページが進まず、最後まで読み通せたかどうか……ただ、初めて出合った本であり、漂流した少年たちがぶつかり合いながらも、力を合わせて協力していく話だったことは記憶に残っています。

中学では江戸川乱歩の「怪人二十面相」、「少年探偵団」シリーズ、高校・大学では松本清張や森村誠一などの推理小説に興味を持ち、文学作品というものには無縁でした。たまには挑戦してみようと手に取るのですが、私にはそのよさが理解できず、最後まで読み切ることができませんでした。

◇教員になって

そんな私ですが、教えをうけた先生の影響もあり、教員の道をめざすことに……

大学卒業後、石川県の小学校の教員に採用され、学年１クラスの小さな小学校の５年担任となりました。理数や体育は好きで教える自信も少しはありましたが、小学校ですから、国語の授業も当然あります。教材なので、そんな長文はありませんが、教材研究が必要となります。自分が読んで自分なりに理解することと、子どもに教えることとはまったく別物です。

教員として、初めて出合った物語が、椋鳩十の「大造じいさんとガン」です。老狩人と利口なガンの知恵比べを描いた物語ですが、ガンの仲間を思う気持ちや人とガンの心のつながりが情景描写とともに描かれていて、とても印象に残っています。

６年担任となった折には、宮沢賢治の「やまなし」という教材と出合いました。はじめ読んだ時には、二枚の青い幻燈やクラムボンが出てきたり……物語の内容も主題もまったく理解できず、子どもたちに教えるどころではありません。先輩の教員に相談したところ、何かを教えるのではなく、子どもの感じたことを大切にし、授業を展開すればいいんだと……よくわからないまま、子どもたちに全文をノートに写させ、一人ひとりが不思議に思ったことや印象に残ったこと等の書き込みをし、子どもの考えや感想を中心に学習をすすめていきました。「なるほどなぁ。そうも考えられるなぁ。」と、逆に子どもたちから教えられたことを思い出します。

中学年の研究授業の参観で、金子みすゞの詩「わたしと小鳥と鈴と」を知りました。平易な言葉で、それぞれがすばらしいということが表現されていて、「みんなちがって　みんないい」のフレーズが心に残りました。作者は、他にどんな作品をつくっているのだろうと興味がわき、本を

買ってきて読んでみました。「星とたんぽぽ」や「蜂と神さま」など、やさしく心に語りかけてくる作品が数多くありました。中でも、最も感動したのが、「土」という詩です。一見いらないように見えるものでも自然界の中で何かの役に立っている。「土」を「人」に置き換えることで、「いらない人はいないんだよ！」というメッセージが強く伝わってきて、その後クラスの子にも紹介し、学級づくりにも活用していました。

最後に、金子みすゞの「土」を紹介し、私の拙い「本との出合い」の結びとします。

土

こッつん　こッつん
打たれる土は
よい畠になって
よい麦生むよ。

朝から晩まで
踏まれる土は
よい路になって
車を通すよ。

打たれぬ土は
踏まれぬ土は
要らない土か。

いえいえそれは
名のない草の
お宿をするよ。

（教育図書館運営委員・日本教職員組合書記次長）

教育図書館について

教育図書館は1966年10月１日、（財）日本教育会館の附設図書館として設立されました。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほか、国民教育文化総合研究所（略称教育総研、前身は国民教育研究所）の研究成果、教育学一般、教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供しています。

当館では、蔵書約64,000冊がインターネットから検索できます。また、2013年３月から、千代田区立図書館のホームページ「大学・専門図書館横断検索」からも教育図書館の蔵書が検索できるようになりました。

最近では教育や教育問題、教育運動などを調査研究する人々のほかに、文芸書、読み物なども数多く取り揃え、多方面に利用されています。

蔵 書 の 特 徴

教育図書館は教育書を中心に和書約45,000冊のほか、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌など2013年３月現在で、合わせて64,000冊を超える図書を収蔵しています。現在、日教組や教育総研の刊行物を含むこれらの図書はすべて、インターネット（http://opac3.library.ne.jp/kyoikutoshokan/）で検索できます。

特 別 コ ー ナ ー

- **平和資料コーナー**：反核・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- **日教組刊行物コーナー**：日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊ＪＴＵ」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- **教育総研刊行物コーナー**：年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書、海外教育視察団報告書などこのほか旧国民教育研究所時代のあらゆる刊行物も含む
- **日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ**
- **都道府県・高教組史誌、同機関誌**
- **文部科学省統計調査報告書・刊行物**：学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導要領、指導書など
- **海老原治善文庫**：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長
- **鈴木喜代春文庫**：児童文学者、元教育相談室相談員

利　用　案　内

＊　**開館時間**：10：00　～　16：30

＊　**休 館 日**：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日

＊　**レファレンス・サービス**：当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています（電話、ＦＡＸ、メールによる質問にも対応）。

＊　**コピーサービス**：可

＊　**交通案内**

1. 神保町駅（東京メトロ半蔵門線､都営新宿線ともにA1出口より徒歩3分）
2. 九段下駅（東京メトロ東西線　6番出口より徒歩6分）
3. 竹橋駅（東京メトロ東西線　北の丸公園側出口より徒歩5分）
4. 水道橋駅（ＪＲ総武線西口より徒歩12分）

最近の受入図書（１）

（2013年３月～2013年６月受入）

【日本教職員組合刊行物】

『日教組教育研究全国集会報告書　第62次（第１分科会～第25分科会全37冊）』日本教職員組合編・発行　2013.2

【教育総研刊行物】

『季刊フォーラム　教育と文化71　2013 Spring』国民教育文化総合研究所編・発行　2013.4

『みんなの放射能入門』国民教育文化総合研究所編　アドバンテージサーバー　2013.3

【教組史・教組刊行物】

『雲になってきえた』長崎県原爆被爆教師の会編　長崎県教職員組合発行　1975.5

『原子野のこえ』長崎県原爆被爆教師の会編　長崎県教職員組合発行　1975.5

『三たび許すまじ』長崎県原爆被爆教師の会編　長崎県教職員組合発行　1975.5

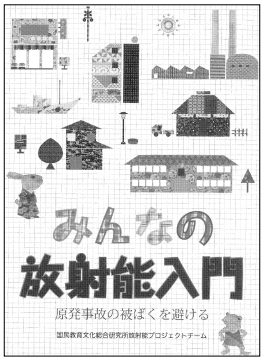
『夾竹桃の花さくたびに』長崎県原爆被爆教師の会編　長崎県教職員組合発行　1975.5

【平和資料】

『予防訴訟の記録（国歌斉唱義務不存在確認等請求訴訟 ── 高裁（2006～2011）・最高裁（2011～2012）を中心に ──』「日の丸・君が代」強制反対予防訴訟をすすめる会編・発行　2012.12

『はだしのゲンわたしの遺書』中沢啓治著　朝日学生新聞社　2013.3

≪図　書　紹　介≫



国民教育文化総合研究所放射能プロジェクトチーム編『みんなの放射能入門　原発事故の被ばくを避ける』アドバンテージサーバー、2013年３月発行

東日本大震災から２年以上がたった。大震災直後に発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故 ── その原因は「津波」によるものなのか、「地震」によるものなのか、見解は分かれているが ── による放射能汚染は、いまだに収束が見えていない。

原発事故による被ばくを避けるためには、どのようにしたら良いのか。放射能汚染のことは忘れて、あまり深くは考えないようにするというのも、精神衛生を保つための一つの方法なのかもしれない。だが、それは将来世代に対して、あまりにも無責任な態度ではなかろうか。

本書は、原発事故による被ばくを避けるために、どのようなことに気を付けたら良いのかを具体的に、イラストや図表なども交えて、分かりやすく説明している。

本書は、国民教育文化総合研究所（教育総研）内に設置された「放射能プロジェクトチーム」の編集によるものだ。このチームのメンバーは、原子力情報資料室の共同代表としても有名な工学博士の山口幸夫さん、北海道教職員組合書記長を務

めた神（じん）貴夫さん、福島県平和フォーラム事務局次長の國分俊樹さん、そして、教育総研職員の伊藤書佳（ふみか）さんの４人である。いずれも、原子力発電の問題や放射能汚染の問題に明るい人達だ。

「この本は、原発事故が起こった国で生きつづけていくために必要なこと、毎日のくらしのなかで知っておかないと困ることや気をつけたほうがいいことを書いた」実用書（76頁）として位置付けられる。そして、「放射能が降った日本でどうくらす」かについて「28の質問と、いまわかっていること」（13頁）という形で、極力平易に書かれており、一般の人にも読みやすい構成となっている。

例えば、「放射能」と「放射性物質」と「放射線」。原発事故後からよく取り上げられるようになった言葉なので、以前よりはかなり周知が進んできているようには思うが、それでも、似たような言葉であるので、一般の人にはその違いがよく分からない。

これについては、「線香花火」で言えば、「火花を出す能力が放射能」、「玉が放射性物質」、「火花が放射線」といったように、分かりやすいたとえで解説されている（18頁）。

他にも、ベクレル（Ｂｑ）やシーベルト（Ｓｖ）などの単位について、あるいは、放射線におけるα（アルファ）線、β（ベータ）線、γ（ガンマ）線、Ｘ（エックス）線、中性子線といった、テレビや新聞などでよく耳にするものの、その違いがよく分からない用語についても、平易な説明が加えられている（19～23頁）。

もちろん、説明されているのは、そうした用語解説的なものばかりではない。

「放射線を浴びるとどうなるの」か（24頁）、「放射能がたくさん降ったのはどこ」か（34頁）、「放射能の影響はいつまで」あって「いつ消えるの」か（39頁）、「自然放射線と人工放射線に違いはあるの」か（42～43頁）、「子どもは放射線の影響を受けやすいの」か（44頁）、「浴びるとみんな、がんになるの」か（46～47頁）、「放射線からどうやって自分を守るの」か（50～51頁）、「被ばくしているってわかったらどうすればいい」のか（65頁）といった、子どもたちや私たちにとって非常に気になることについても、もちろん触れられている。

面白いのは、哲学的とも思える話もあることだ。福島産の農産物について、皆で消費して福島を応援した方が良いのか。それとも、被ばくを避けるために消費は回避した方が良いのか。悩む人は多いと思う。

これについて本書は、「汚染された食べものを食べたくないと考えるのは、責められることではない」として、「農家の人のなかにも、食べないでほしいと思っている人はたくさんいる」し、「汚染した土壌で作物が放射能に汚染されないように、工夫と努力をつづける農家の人たちは全国にいる」ことを指摘している（62～64頁）。

福島産の農産物を消費するか否かは、結局は一人ひとりが判断すべき問題であり、どちらが正解ということではないし、どちらも正解なのかもしれない。この点についての本書の立場は、農産物を消費することばかりが福島支援ではない、ということなのだろうが、いずれにしても、私たちが何をどのようにすることが福島支援になるのか、考えるきっかけを与えてくれると思う。

なお、本書には５人目、６人目の“著者”がいる。福島県の高校２年生「ももちゃん」と、千葉県の小学３年生「はっちゃん」だ。「ももちゃん」は今でも福島県南相馬市を離れて郡山市で避難生活を続け（８～12頁）、「はっちゃん」は学校給食をやめて弁当を持参しているという（59～61頁）。

原発事故は、災害弱者と言われる子どもたち（や高齢者、障害者など）に、特に被害を与える。「子どもの人（ママ）を守るのは、大人の役目である」（76頁）。そのことを私たちは肝に銘じな

いといけないと思う。

蛇足だが、本書の編集の中心となった伊藤書佳さんは、元々はライター・編集者だが、現在は教育総研職員として、同研究所が季刊で発行する『教育と文化』の編集を担当している。本書はその編集の傍ら発行されたものであり、日常業務に加えての編集作業は、大変であったと推察される。

この『教育と文化』を伊藤さんの前に担当していたのは、今年４月に日本大学准教授に就任した山岸竜治さん。そして、その前の前に担当していたのは、今年２月に神奈川県寒川町議会議員に就任した私である。このように、教育総研の『教育と文化』編集担当を経て、次のステップへと進むのがこのところの傾向となっている。

伊藤さんの今後の活躍が期待されるし、本書は伊藤さんの今後の活躍を予感させるものともなっている。

（神奈川県寒川町議会議員・専修大学大学院博士課程生　中川　登志男）

最近の受入図書（２）

（2013年３月～2013年６月受入）

【社会・教育・軍事関係】

『日教組と階級闘争』文部省初等中等教育局地方課編・発行　1963.11

『学校保健統計調査報告書　平成24年度』文部科学省生涯学習政策局調査企画課編　国立印刷　2013.3

『社会教育調査報告書　平成23年度』文部科学省生涯学習政策局調査企画課編　日経印刷　2013.5

『日米同盟の正体』孫崎享著　講談社　2012.11

『不愉快な現実』孫崎享著　講談社　2012.3

『本当は憲法より大切な日米地位協定入門』前泊博盛著　創元社　2013.3

『「対米従属」という宿痾』鳩山由紀夫・孫崎享・植草一秀著　飛鳥新社　2013.6

『北京烈日』丹羽宇一郎著　文藝春秋　2013.5

『「日本国憲法」なのだ』赤塚不二夫・永井憲一著　草土文化　2013.6

『教育判例で読み解く憲法』柳瀬昇著　学文社　2013.4

『新・現代思想講義　ナショナリズムは悪なのか』萱野稔人著　ＮＨＫ出版　2011.10

『いまなぜ公務員の市民的・政治的自由か』大久保史郎著　学習の友社　2012.7

『「戦後革新勢力」の奔流』五十嵐仁著　大月書店　2011.3

『ドイツ統一・ＥＵ統合とグローバリズム』木戸裕著　東信堂　2012.11

『公立学校の教育人事システム』川上泰彦著　学術出版会　2013.6

『学校の教育効果と階層』須藤康介著　東洋館出版　2013.2

『日本型教育システムの誕生』渡久恭子著　木鐸社　2008.6

『教室内（スクール）カースト』鈴木翔著　光文社　2012.7

『グローバル化・社会変動と教育１』ヒュー・ローダ著　広田照幸編訳　東京大学出版会　2012.4

『グローバル化・社会変動と教育２』ヒュー・ローダ著　苅谷剛彦編訳　東京大学出版会　2012.5

『ジャーナリストからみた戦後高校教育史』黒羽亮一著　学事出版　1997.6

『アメリカ教育改革の最前線』北野秋男著　学術出版会　2012.10

『道徳教育の取扱説明書』貝塚茂樹著　学術出版会　2012.9

『米国対日占領政策と武道教育』山本礼子著　日本図書センター　2003.11

『地方改良運動期における小学校と地域社会』笠間賢二著　日本図書センター　2012.12

『公教育制度における教員管理規範の創出』尾崎公子著　学術出版会　2007.8

『スタンフォード21世紀を創る大学』ホーン川嶋瑤子著　東信堂　2012.3

『比較教育学の地平を拓く』山田肖子著　東信堂　2013.2

『教育機会均等への挑戦』小林雅之著　東信堂　2012.10

『現代アメリカ教育ハンドブック』アメリカ教育学会編　東信堂　2010.10

『子ども・若者の自己形成空間』高橋勝著　東信堂　2011.6

『シティズンシップ教育のすすめ』杉浦真理著　法律文化社　2013.4

『大学教育改革と授業研究』須藤敏昭著　東信堂　2012.10

『比較教育学研究』日本比較教育学会編　東信堂　2013.1

『関係性をめぐって』臨床教育人間学会編　東信堂　2011.7

『関係性の教育倫理』川久保学著　東信堂　2013.1

『教育委員会制度論』三上昭彦著　エイデル研究所　2013.3

『「学ぶ力」を取り戻す』寺脇研著　慶應義塾大学出版会　2013.5

『学校と保護者の関係づくりをめざすクレーム問題』古川治著　教育出版　2013.4

『普通の教師が普通に生きる学校』小野田正利著　時事通信出版局　2013.3

『指導死』大貫隆志著　高文研　2013.5

『卒業式の歴史学』有本真理著　講談社　2013.3

『教育を原理する』筒井美紀・遠藤野ゆり著　法政大学出版局　2013.4

『民主主義への教育』上野正道著　東京大学出版会　2013.3

『学習の本質』ＯＥＣＤ教育研究革新センター編　立田慶裕・平沢安政監訳　明石書店　2013.3

『開港四百年長崎の歴史』松浦直治著　長崎開港四百年記念実行委員会編　1970.11

『超ウルトラ原発子ども』伊藤書佳著　ジャパンマシニスト社　1992.9

『東日本大震災と教育界』大森直樹著　明石書店　2013.3

『市川昭午著作集第１巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（学校管理運営の組織論）

『市川昭午著作集第２巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（教育行政の理論と構造）

『市川昭午著作集第３巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（生涯教育の理論と構造）

『市川昭午著作集第４巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（未来形の教育）

『市川昭午著作集第５巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（教育の私事化と公教育の解体）

『市川昭午著作集第６巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（未来形の大学）

『市川昭午著作集第７巻」』市川昭午著　学術出版社　2013.2（論文集成　教育の財政と経済）

『気になる科学』木村有希子著　毎日新聞社　2012.12

『超マクロ展望　世界経済の真実』水野和夫・萱野稔人著　集英社　2010.11

『日本の統計　2013年版』総務省統計局編　日本統計協会発行　2013.3

『地方行政白書　平成25年版』総務省編　国立印刷局　2013.4

『全改訂労働基準法のポイント』安西愈著　厚有出版　2012.3

『金融緩和の罠』藻谷浩介著　集英社　2013.4

『労働組合とはなにか』熊沢誠著　岩波書店　2013.1

『非正規雇用と労働運動』伊藤大一著　法律文化社　2013.3

【小説・エッセイほか】

『海賊とよばれた男　上・下』百田尚樹著　講談社　2012.3

『モンスター』百田尚樹著　幻冬社　2012.4

『夢を売る男』百田尚樹著　太田出版　2013.2
『冷血　上・下』高村薫著　毎日新聞社　2012.11
『いつか陽のあたる場所で』乃南アサ著　新潮社　2012.11
『すれ違う背中を』乃南アサ著　新潮社　2012.12
『いちばん長い夜に』乃南アサ著　新潮社　2013.1
『望郷』湊かなえ著　文藝春秋　2013.1
『ビブリア古書堂の事件手帖４』三上延著　メディアワークス文庫　2013.3
『沈黙の町で』奥田英朗著　朝日新聞出版　2013.2
『人生がときめく片づけの魔法』近藤麻理恵著　サンマーク出版　2011.11
『人生がときめく片づけの魔法２』近藤麻理恵著　サンマーク出版　2012.10
『カントリー・ロード』阪口正博著　ＢＬ出版　2013.2
『ハピネス』桐野夏生著　光文社　2013.2
『屋上ミサイル』山下貴光著　宝島社　2009.1
『公開処刑版鬼女まつり』堀内公太郎著　宝島社　2013.3
『公開処刑人森のくまさん』堀内公太郎著　宝島社　2012.3
『爆弾テロリスト灰色パンダ』水田美意子著　宝島社　2013.3
『５分で読めるひと駅ストーリー』蓮見清一著　宝島社　2012.12
『海猫リポート』有川浩著　文藝春秋　2012.11
『県庁おもてなし課』有川浩著　角川書店　2013.4
『ロスト・ケア』葉真中顕著　光文社　2013.2
『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』村上春樹著　文藝春秋　2013.4
『夢幻花』東野圭吾著　ＰＨＰ　2013.3
『名も無き世界のエンドロール』行成薫著　集英社　2013.3
『インビジブルレイン』誉田哲也著　光文社　2012.7
『家族ゲーム』本間洋平著　集英社　2013.4
『鉞子』内田義雄著　講談社　2013.3
『幸福の王子』オスカー・ワイルド著　曽野綾子訳　バジリコ　2013.1
『「折れない心」をつくるたった１つの習慣』植西聡著　東京出版　2013.4
『心』姜尚中著　集英社　2013.4
『女子会川柳』シティリビング編集部編　ポプラ社　2013.1
『シルバー川柳・笑いあり、しみじみあり』みやぎシルバーネット編　ポプラ社　2013.1
『アルコール依存症は治らない＜治らない＞の意味』なだいなだ著　中央法規出版　2013.3
『直観力』羽生善治著　ＰＨＰ研究所　2012.12
『伊集院静の流儀』伊集院静著　文藝春秋　2013.3
『プロ野球重大事件』野村克也著　角川書店　2013.2
『無力』五木寛之著　新潮社　2013.4
『楽園のカンヴァス』原田マハ著　新潮社　2012.1

編集後記

岡島図書館運営委員には、巻頭文として、初めて出合った本、興味を持った本、挑戦してみた本、教材研究した本、心に残った本など、様々な本とのエピソード、出合い、そして、本の素晴らしさを論述していただき、誠に有難うございました。

当図書館も、利用者の皆様にとって、より良い本との出会いができますよう、努めてまいります。

また、中川さんからは、子どもたちの被ばくについて、分かりやすく具体的な説明のある有為な図書の紹介をしていただきました。多くの皆様が読まれることをご期待申し上げます。（高橋）